2021 年 8 月 31 日〔No.56〕
筑波研究学園都市研究機関労働組合協議会（学研労協）http://gkn-rkyo.sakura.ne.jp/

学研労協 NEWS ニュース

第 39 回 国立試験研究機関全国交流集会（国研集会）報告

今年の国研集会は、昨年に引き続きコロナ禍ということでオンライン（Zoom）での開催となりました。「DX（デジタル改革）・ダイバーシティ（多様性）・パンデミック（新型コロナ）と国研」の集会テーマの下、8 月 18 日（水）夕刻に第 1 分科会「ダイバーシティ（多様性）の課題を考える」・第 2 分科会「コロナ禍の国立感染症研究所の課題」をパラレルで、また 8 月 21 日（土）午後には 2 つの記念講演「デジタルトランスフォーメーション（DX）と国研」（市川類・一橋大学イノベーション研究センター教授）、「研究機関にとって「ダイバーシティ」とは？」（原山優子・理化学研究所理事/ダイバーシティ推進室長）を含む全体集会を行い、組合員を中心にマスコミ関係者等、延べ 100 人以上の参加がありました。

第 1 分科会では、「農林水産研究におけるダイバーシティの拡大について」（マーシー・ワイルダー・国際農研プロジェクトリーダー/全農林国際農研分会執行委員長）、「ミャンマー出身女性研究者から見た日本の大学・研究所」（ティンティン ウィン シュイ・国立環境研主幹研究員）の 2 件の報告がありました。どちらも実績ある外国人女性研究者からのお話で、国際農研において、働く人の多様性をふまえた働きやすい研究環境作りへの取り組みが所を挙げて活発に行われていることや、ミャンマーでは大学で学ぶ学生は女子学生の方が多いなど、興味深い内容や初めて知る情報が紹介されました。また、栗原良将国研集会実行委員（高エネ研）より、個人アンケートのうちダイバーシティにかかわる設問の結果報告が行われ、子育て支援、柔軟な勤務時間・場所の設定が最も求められていることが分かりました。参加者からも多様性についての理解が深まった等の感想が寄せられ、たいへん有意義な分科会となりました。

第 2 分科会では「感染研の抱える問題について：新型コロナウイルスパンデミック前と後でどう変わったか?」（小川基彦全厚生副委員長・感染研支部）の報告がありました。新型コロナウイルス感染症パンデミックが猛威を振るい、日本でも自治体の緊急事態宣言が相次ぐ終わりが見えない状況の中、感染症対策の砦である国立感染症研究所の現状が紹介されました。コロナ禍における国立感染研の仲間の奮闘に心からの敬意を表するとともに、国民が安心して生活するためには、国研に対する十分な予算と人員の配分が必要であることが強く再確認されました。

全体集会において、市川先生の DX に関するご講演では、DX に関する基礎知識やビッグデータ、AI から DX に至る最近の動きの解説から、研究プロセスにおける DX、さらに DX を活用した国研の新しいビジネスモデルまでの流れを分かりやすくお話しいただき、これまで聞いたことはあるがよく分からない言葉だった DX に対する理解がぐっと深まりました。原山先生のダイバーシティに関するご講演では、ご自

身のファミリーヒストリーを交えてのダイバーシティの解説にはじまり、「加藤セチプログラム」など理化学研究所のダイバーシティ推進の取り組みのお話や、北欧のスウェーデンでの先進事例（またそれが先人の大きな努力によって獲得されたものであること)、ダイバーシティ推進における課題など貴重な話題をお話しいただきました。どちらのご講演でも、Zoom ウェビナーの Q&A 機能を活用した活発な議論が行われました。基調報告では、笠松鉄兵国交労連書記次長より令和 3 年の人事院勧告、ボーナスのカットや定年延長に関する労働条件に関する重要な情報の報告がありました。栗原実行委員からのアンケート結果報告では、定点観測としての組合員の労働環境に対する意見、及び今回の集会のテーマである DX やダイバーシティに関する意見のまとめが報告されました。また、第 1 、第 2 分科会の報告が各々の司会者（栗原実行委員、小滝豊美実行委員（全農林)）から行われました。最後に、第 39 回国研集会のまとめとして、「国研の持つ重要な使命を果たすためには、より一層の予算と人員の拡充が必要である」という提言を出そう、ということが同意されました。